しかし、それを後押しするように館内は蛮国への応援一色に。逆に鹿麒麟にとってはアウエー感状態満載。本当なら愛弟子に押せ押せコールを送りたい鹿賀乃戸親方だが「今回ばかりは蛮国に勝ってもらって」と静観の様子。

優勝を賭けた一番は、先に左を差した蛮国が腰を落とす万全の体制となって鹿麒麟を破った。勝負が決まった瞬間「やったー、蛮国勝ったー、蛮国優勝だー」と一番喜んでいたのは何を隠そう鹿賀乃戸親方だったかも。

巨　鵬●（寄り切り）○茅ヶ崎

また、蛮国は優勝とともに富士浪部屋からは、夏雄大以来となる十両昇進も手中にした富士浪相談役が存命のうちに朗報を届けられなかったことが誠に残念であるが、これからも天国から蛮国の活躍を楽しみに見守っていられることと思う。

鹿麒麟も勝っていれば来場所上位まで番付を上げられそうだったが、今場所の様な相撲が取れれば、また優勝争いに絡んで、更には一気に昇進なんてこともあり得るかも。その他で昇進を果たしそうなのは、真田丸、磯燕桃乃洲が有力。新十両は蛮国と真田丸となる来場所は、連日蛮国の取組に注目が集まることとなるだろう。

東西筆頭の夢ノ天と電幕は２勝２敗で迎えともに勝てば返り咲きとなるところだったが夢ノ天は磯燕、電幕は桃乃洲に敗れて負け越し、来場所に出直しを図ることになった。

９人を擁する桐壺勢では東灘と椿富士が４勝１敗と健闘を見せた。昇進のチャンスだった東西三枚目の若虎景と藤丸は１勝４敗と成績は振るわず。新幕下の虎吉田と虎西田は虎吉田が負け越しとなり明暗が分かれた。そして、元幕内の菊の里が最後の相撲で虎前田になすすべなく寄り切られて４敗目を喫し引退となる見込みだ。（山里）

三段目～序の口

三段目は磯若と富士の海が全勝対決。とりわけ富士の海は幕下の弟弟子蛮国と同様、先月亡くなった富士浪親方の晩年の力作。それを春日根親方が丁寧に稽古を付け、奇跡の復活と言われている力士。場内の声援は富士ノ海一本。すっかり嫌われ者となった磯若だが、声援も後押ししてが、富士の海が勝ちを収めた。

磯　若●（寄り切り）○富士海

序二段は実力派自力岳に新鋭秋田部屋の難波山。秋田部屋として初めての各段優勝のチャンスが部屋創設早々に巡ってきただけに大いに気合が入る。応援席もなんとか秋田部屋に初優勝をと声援が送られたが、自力岳の上手いぶりに寄り切られ、初優勝はお預けとなった。

難波山●（寄り切り）○自力岳

序の口は新設２場所目の山里部屋の里錦がただ一人全勝。対戦する１敗の阿仁に敗れると１敗力士数人との決定戦になるところだったが、すんなりと寄り切り、全勝優勝を果たした。（鹿賀乃戸）

里　錦○（引き落し）●阿　仁

人事往来

【引退】

源氏丸（元関脇）→福錦
磯　昇（元小結）→団子山
大江錦（元関脇）→武者処

巨星墜つ

徳川御大永眠す

令和４年３月２３日、紙相撲協会に突然の悲報が舞い込んだ。「徳川義幸氏がタイ国プーケットにて永眠しました。現地の日本大使館の計らいで葬儀、散骨は現地にて行います」とのご親族からの一報。３月１７日に通報があり、関係者が自宅に訪ねたところ死亡が確認されたとのこと。

徳川御大と言えば、言わずと知れた紙相撲の神様。力士の上手と下手の高さを互い違いにして四つで組めるように規定し、身長や足の寸法などを規定、土俵に紙やすりを採用し紙相撲を臨場感のあるものに変えるという大発明を行ったのであった。

昭和５０年代に紙相撲がテレビ、新聞、雑誌で取り上げられるようになって、当時高校生だった八重垣、錦風、友砂、桐壷、春日根、鹿賀乃戸らが入門、現在まで綿々と紙相撲が続く原動力となっている。

平成になって御大はプーケットに移住し、本場所が横浜の八重垣宅に移ったあとも、年に１度は帰国して本場所に参加、御大ならではの土俵捌きで奇跡の取組を生み出し、神の手降臨と言われたものだった。

その後、本場所は駒込、練馬を移るなか、年に一度の再会を協会員一同楽しみにしていたが、一昨年のコロナ禍以来、帰国されることなく、遂に再会の機会のないまま、永遠の別れとなったことは本当に残念なことだ。

できる限り長く紙相撲を続けることが徳川御大への最大の恩返しになると信じ、和気あいあいと紙相撲を続けていこうと改めて誓ったのであった。合掌。